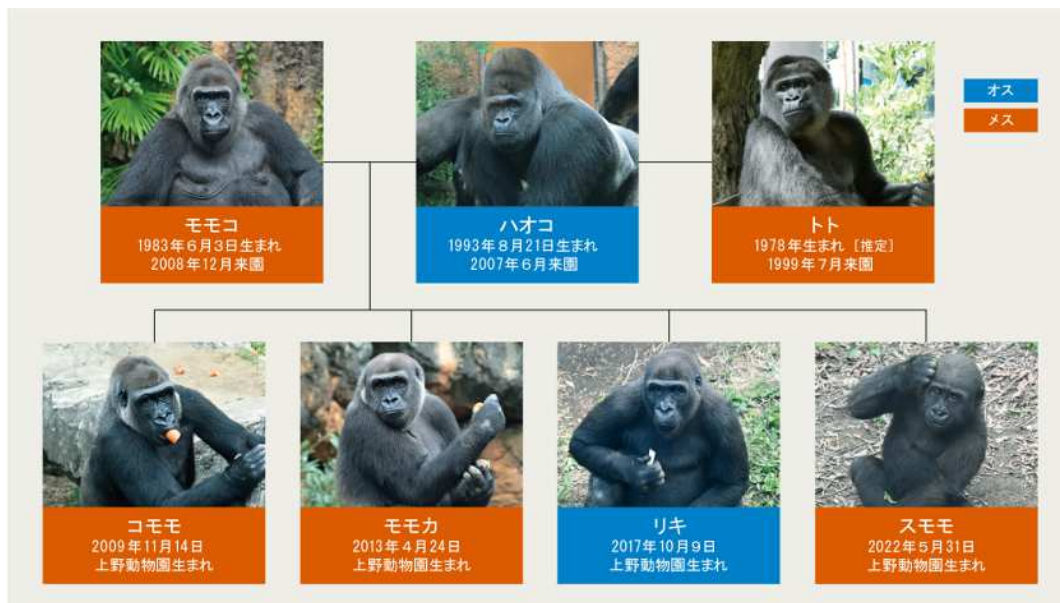


# ニシゴリラの子の人工哺育と群れ復帰について

## 1. 人工哺育の決断

日本で一番歴史のある上野動物園では、約 67 年前からニシゴリラを飼育している。本種は国際自然保護連合のレッドリストで「深刻な危機」にランクされる希少種で、当園でも繁殖に取り組んできた。（図－1）

2022 年 5 月末、ニシゴリラの子「スモモ」が新たに誕生した。しかし、母親の「モモコ」は出産前から重度の貧血を患っており、授乳が出来なかった。生後 2 日目にはスモモの衰弱が見られたため、「スモモ」を一旦群れから離して人工哺育をし、のちにゴリラたちに戻す決断をした。一般的に人工哺育で育つゴリラの子は、1 年半以内に群れに戻り、ゴリラの社会性を学ぶ必要があるとされている。そうでなければ、群れで生活するために必要な行動や振る舞いができず、ゴリラとして生きていけなくなる。加えて本事例は上野の長い歴史の中で初のことであった。そのため、大きな不安とプレッシャーが職員にのしかかった。



図－1 上野動物園のニシゴリラ家系図

## 2. どうやって群れに戻すのか

まずはスモモを可能な限り早く群れに復帰させることを最重要課題とし、プロセス表の作成に着手した。ゴリラの人工哺育は国内でわずか3例目であったが、海外での先行事例は少なくなかった。そこで、アメリカやヨーロッパの動物園の事例を調査した。特に有益な情報となったのはバルセロナ動物園の事例である。失敗事例も含めた記録が詳細に記されており、気を付けるべき点を明確化できた。加えて、どの段階で次のステップに進むのかを事前に予測するため、ゴリラの子の体や行動の発達に関する海外の研究文献を参照した。これらから得た情報から、当園の群れと施設に合わせた独自の「プロセス表」を完成させた。（図－2）

| 第1段階<br>(生後0～3か月)                                                                                          | 第2段階<br>(生後3～8か月)                                                                                                              | 第3段階<br>(生後8～12か月)                                          | 第4段階<br>(生後12か月以降)                                                                                                               | 第5段階                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 新しい環境に慣らす                                                                                                  | ゴリラ舎で格子越しの対面                                                                                                                   | 子を預ける個体との同居                                                 | ペアを群れに導入                                                                                                                         | 個体同士の関係の観察                                                                         |
| ① 動物病院で哺乳を実施。母親モモコと格子越しに毎日対面させる。<br>② 群れ全体と柵越しに毎日対面させる。<br>③ スモモの状態を観察しながら、ゴリラ舎での哺育に切り替える(群れの寝室の隣のケージへ移動)。 | ① 隣の寝室にいる群れと格子越しに対面させる。<br>② 格子越しの哺乳に慣らす。<br>③ 日中、群れが放飼場に出ているあいだにスモモを群れの寝室に慣らす。<br>④ 放飼場にも慣らす。<br>⑤ 格子越しの接触の反応を見てスモモを預ける個体を選ぶ。 | ① スモモを預ける個体を群れから離し、スモモと格子越しで接触できるようにする。<br>② 2頭を同居させ、ペアにする。 | ① ペアと群れを格子越しに対面させ、接触できるようにする。<br>② 状況を観察しながら、ペアと父親ハオコを同居させる。<br>③ 状況を観察しながら、同居個体を増やす。スモモに対する問題となる行動が観察された場合、いったん群れから離し、あとで合流させる。 | ① スモモが群れのなかで社会的な行動を発達させているかどうか観察する。<br>② 群れにおけるスモモと他個体の社会的繋がり形成が明らかになったらプロセス完了とする。 |

図-2 スモモを群れに戻すまでの「プロセス表」(簡易版)

### 3. 群れへの復帰と今

第1段階時、職員が毎日スモモをモモコの前に連れていき格子越しに対面させていた。しかし、モモコの我が子に対する興味は漸減しているように見え、1か月を過ぎたころからは目線すら送らなくなった。子は群れに戻る際、常に面倒を見てくれる個体が必要である。モモコが世話をしなかった場合、姉ゴリラを代理母とする計画であったが、あくまで第一候補は実母のモモコとした。一方、プロセス表通りに手順を踏むことで、群れとスモモ間で相互の親和的行動が増え、良好な関係を構築できた。

第3段階直前、モモコのスモモに対する興味は薄くても、威嚇行動はなかった。そのため、同居すれば子の世話をすると予想し、モモコに戻す決断をした。そして279日齢時、母子を同居させた。その瞬間、モモコはスモモを自分の胸元へ引き入れ、しっかり抱きかかえるという予想以上の行動をした(写真-1)。続いて5日後、父親のハオコと母子ペアを同居した。リーダーが許容すれば、子の群れ内での安全が確保されるためである。同居後、ハオコ自身が群れと離れたことの方に意識が働き、落ち着きを失った。そのためすぐに同居を解消したが、これはすでにスモモを当然の存在と認識していることに起因すると捉えた。そこで、2日後に母子ペアを群れ全体と同居したところ、全個体に許容され、スモモは完全に群れへの復帰を果たした。

今回、綿密に計画した群れ復帰のプロセスを踏むことで、予定よりも早くスモモを群れに戻すことが出来た。現在スモモは2歳を超え、順調にゴリラとしての社会性を発達させながら成長している(写真-2)。スモモをゴリラとして生かすため、創意工夫した結果が実を結んだと考える。



写真-1 モモコがスモモを抱いた瞬間



写真-2 群れの中で暮らすスモモ